

交差点確認に強い味方

北大大学院情報科学研究科の山本強教授らが、自動車の運転時に見通しの悪い交差点などで左右の確認を支援するシステムを開発した。歩行者が近づくとスマートフォン(多機能携帯電話)などから警告音が鳴る仕組みで、高齢ドライバーによる交通事故を減らそうと開発した。実用化を目指す山本教授は「女性などの運転が苦手な人にも役立てたい」と話している。

北大教授ら開発

左右を映すカメラ2台を、スマートフォンのほか、iPad(アイパッド)のように設置。映像を車載の専用d(ディスプレイ)のよう処理装置に送って情報処理を行い、歩行者などが専用端末より安価で、も近づく、運転者が持つともスマートフォンなスマートフォンなどのアなどを持っている人は端末を鳴らし、画面に費用がかからないため、「歩行者が近づいていまシステムの低価格化にもす」との警告文を出す。つながらる。

今後、機器の低価格化に向け、さらに研究を進めながら、実際に高齢者に運転してもらい使い勝手を確かめる。製造を希望するメーカーがあれば、技術を提供し、早ければ来年度にも実用化したい考えだ。

事故減へ支援システム

山本教授と札幌のソフト開発会社シーズ・ラボ、東京の建設コンサルタンツ会社パシフィックコンサルタンツが2009年から、道の委託で高齢者の運転を助ける技術開発として研究してきた。新システムは高齢ドライバーが見落としやすい交差点などでの発進時の左右の確認を支援する。運転者の端末はスマートフォン(多機能携帯電話)などから警告音が鳴る仕組みで、高齢ドライバーによる交通事故を減らそうと開発した。実用化を目指す山本教授は「女性などの運転が苦手な人にも役立てたい」と話している。

歩行者接近「携帯が警告

おり、パシフィック社の担当者は「冬の雪山の間から幹線道路に出る際など、多くの運転者に役立つ」、山本教授も「死角の多い農業用トラクターなど応用範囲も広い」と話している。

システムは端末を除いて2万〜3万円台が目

運転者の端末はスマー

幅広い活用を想定して